



常務取締役
赤地 正行氏

代表取締役社長
赤地 精氏

株式会社 杏花印刷

<https://kyoka-print.co.jp/>

本社：長野県長野市大字穂保字夫婦池436-12
(北部工業団地)

TEL:026-296-8373

設立：1967年(昭和42年)

代表取締役社長：赤地 精



2台の両面カラー即乾機で台風災害からの復活に挑む

1967年に設立された株式会社杏花印刷は、出版印刷が盛んな長野県において、仲間仕事のカラー印刷を主に手掛けてきた。そんな同社を2019年に台風19号が襲った。生産設備は全損となったが、今まで築き上げてきた制作や営業の力、そして近隣の同業者の応援で、窮地をなんとか乗り切った。2020年2月にA全判 RMGT 920PF-8、同年8月にB1サイズのRMGT 1050V1TP-8という、LED-UVを搭載した2台による両面カラー即乾体制が始まった。代表取締役の赤地 精氏と常務取締役の赤地 正行氏が復活に向けた想いを語った。



B1サイズ(左)とA全判(右)の2台の両面カラー即乾機

の方向にでも進められるように備えたという。

同業者の厚意で窮地をしのぐ

工場の復旧とは別に同社は、お客様から受注した仕事を納品する責任があった。「生産設備が壊滅したので、受注した仕事を亜細亜印刷さん、蔦友印刷さんを始め、長野市中の印刷・製本会社などをお願いした。引き受けていただく側では当社の仕事に加わると、とても人手が足りないということになった。そこで『当社の従業員を働かせていただけるのであればお手伝いさせてほしい』とお願いして、印刷オペレーターを受け入れてもらった。従業員に対しては『補助金で機械を入れられそう。それまでは菌を食いしばって、出向先で頑張ってくれ』と頼み込んだ(赤地常務)。(A全判 RMGT 920PF-8+LED-UVが稼働する)2020年の春まで受け入れていただけて、何とか窮地を乗り切れた。長野市中の関係企業や出向を受け入れていただいた2社には感謝するばかりだ(赤地社長)。

復活の旗印を掲げる

2019年の台風19号が過ぎ去った翌日、河川の氾濫により同社工場は大人の背の高さを超える濁流につかった。RMGTを始め設備メーカーのサービススタッフが駆けつけて、機械の洗浄・復旧作業にあたったが、機械は全損が避けられない状況だった。同社で復旧の陣頭指揮をとった赤地正行常務は「被災後1週間くらいで『激甚災害



2019年の台風19号による河川氾濫が同社を襲った。

に指定されてグループ補助金を使える可能性が高い』と専門家から言われた。若い社員を中心に、使える制度(補助金)を活用して再起を図りたいという声が多く、復活の旗印を掲げた」という。

実はそこに世代間の葛藤があった。常務の父親である赤地精社長は「今までの苦労をもう一回、今度は息子にさせたくなかった。引き際も大事だと感じていたので、『あまり無理するな』と返した」という。その後、二人はやりとりを重ねて、激甚災害に指定されてない段階だったので、どういう未来があるのかいくつかシナリオを描いて、ど



B1サイズ8色両面専用機RMGT 1050V1TP-8+LED-UV



A全判8色片面・両面兼用機 RMGT 920PF-8+LED-UV

ゼロからの設備投資

「全ての機械設備が被災したので、過去にとらわれずゼロベースで設備を選べた。オフセット枚葉機については、被災前には菊全機が3台(2色/2色、4色/4色、5色/0色)、ユニットで言うと合計17胴あった。生産能力を同じ水準に維持しつつ、台数を減らしてランニングコストを下げ生産性を上げる戦略を立てた。仕様において、両面即乾、つまり4色/4色かつUVは外せなかった」(赤地常務)。

次はサイズだ。「今までの仕事内容をグラフ化してみると、A全紙が7割を占めた。菊全機よりランニングコストを抑えられるA全機は必須だと決めた。もう1台をどのサイズにするか、いくつか選択肢があったが、最終的にB1サイズ機を選んだ。2006年に導入した三菱タンデムパーフェクター(以下「TP」と略する)が飛躍のきっかけだったので、TPは外せないと考えた」(赤地常務)。「1050モデルを選んだのは、今まで手を出せなかった領域に進出できると踏んだから。B5サイズ16面付の需要は実は底堅いし、B1ポスターをもっと売り出していきたい」と、赤地社長はRMGT 1050V1TP-8が仕事の幅を広げることを期待している。920mm幅のRMGT 920PF-8+LED-UVはコスト競争力があり、1,050mm幅のRMGT 1050V1TP-8+LED-UVが仕事の幅をひろげる。A列とB列それぞれの需要に対応できるラインアップになった。「印刷機2台を発注したのは2019年の仕事納めの日だった。これを境に、社長はやる気になり、元気を取り戻した」(赤地常務)。

生産現場を率いる中村工場長は「2台体制になって1ヵ月が経ち、不良が発生するロットの割合が被災前の2.5%から0.2%へ大きく改善した。TPは納入後間もないが、いずれはユボや美術本を手掛けたい」と抱負を

語った。被災前に5色ストレート機があったために、5色の仕事も入ってくる。取材当日は、CMYK+シルバーの5色による自動車カタログを、片面・両面兼用機であるRMGT 920PF-8+LED-UVを片面機として刷っていた。



工場長 中村 正一氏



新たにPP貼りや厚手の仕事をこなすべく導入した製本機



「自動化が進んだ印刷機、クラウドや検版装置が入った現場では、職人の勘から数値管理・デジタル管理へ一変した。社員それぞれの仕事ぶりが、数字で実績が出る。これを機に、生産管理体制を高めていきたい」(赤地常務)。

新規ビジネスで三本柱体制へ

「印刷だけでは乗り切れないという危機感をもっている。ITは武器になるし、ITを強化する意味もあって今年2名を採用した。お客様に儲けていただく仕組みづくりを



新たに始めたフリーペーパー事業の印刷物

していきたい」(赤地社長)。これを受けて赤地常務は「マーケティングオートメーション技術を活用した就職支援ビジネスとして、大学、企業、生徒をマッチングするプラットフォームづくりに着手した。コロナ禍で企業側が様子見ではあるが、大学側は前のめりだ」と手応えを感じている。

印刷、ITに続く3つめの柱がフリーペーパーのNsports(エヌスポーツ)だ。「スポーツで信州を元気に!子どもたちに夢と希望を!」をコンセプトに、小・中・高等学校を含めた長野県のプロ・アマチュアスポーツを網羅した魅力ある誌面づくりを目指したものだ。2013年に発刊して7年経った今年は、コロナ禍で特別な夏になっている。「延期の末にやっと開催できた大会は無観客で行われた。我々が撮影したスポーツシーンを満載して8月末に発刊した。わが子の試合を見られなかったご両親がインターネット上でIDやパスワードを打ち込んだ専用画面上で欲しい写真を注文すれば、プリントしてお届けしている。長年の実績が評価されて、大会終了後に総集編にまとめて有料販売する競技が出てきた。フリーペーパーは広告料をもらってトントンだ。自社の広告宣伝として位置づけている」(赤地常務)。印刷に加えて、IT、フリーペーパーの三本柱体制に向けて布石を打った同社は、復活に向けて走り出している。

